論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　秋田　歩

秋田歩氏の博士論文「日本語のガ・ヲ・ニと韓国語の를 reul の対応について　―他動性の観点から―」の審査結果について報告する。

本論文は，韓国語の助詞를 reul を中心とし，それに対応する日本語の助詞ガ・ヲ・ニとの関係を詳細に分析し，主として他動性という観点から，その対応関係の背景にある要因を解明しようとしたものである。特に，를 reul あるいはヲをとる典型的な他動詞文から他動性の弱化とともに를 reul，ヲ以外の格助詞をとる構文に変化していく過程を観察することにより，他動詞文と自動詞文の境界においてそれぞれの格助詞がどのような役割を担って機能しているのかを明らかにしようとする。

本論文は 6 章からなる。第 1 章では，韓国語の助詞를 reul と日本語の助詞ヲの対応，およびそれに関連する他動性に関して，5 つの問題を提起するとともに，格や格助詞に関連する概念について，本論文での立場を明らかにしている。

第 2 章では，韓国語の를 reul と日本語のヲに関する先行研究を概観し，それらを比較することによって，를 reul とヲが多くの部分において共通する機能を持ちながらも，一部で異なる機能を有することを確認している。具体的には，를 reul は「動作の目的」「二重対格構文の与格標示機能」などヲが持っていない機能を有すること，韓国語では他動詞を用いるのに対し，日本語では自動詞や形容詞が対応することを示した。さらに，本論文で重要となる[対象]という概念を整理し，[対象]らしさの度合いによって[対象]を捉えるという立場を取ることなど，本論文での立場を明確にしている。

第 3 章では，「他動性」の観点から両言語の動詞の分類を試みている。従来の研究で用いられている他動性判断のためのパラメータを参考に，動詞の「働きかけ」が及ぶ度合いや方向という意味的な側面と，格枠組みや自動詞・受動形の有無など形式的な側面を考慮に入れることにより，最も典型的な他動詞から感情を表す形容詞まで，11 種類に分類されることを示した。この分類から韓国語と日本語の動詞を見ていくと，[対象]が変化を被るような典型的な他動詞においては，両言語で形式的な差がほとんどみられないこと，韓国語では動詞の表す意味から見て，対象に働きかける度合いが少なくなるほど를 reul 以外の格助詞も使用可能になる傾向が見られること，その種の動詞に関しては日本語でもヲを取らない，あるいは使用する格助詞にゆれがあることなどを明らかにしている。

第 4 章では，第 3 章で行った「他動性」の観点からの動詞分類で，韓国語では를 reul と에 e / 에게 ege の両方を取り得るタイプ，日本語ではヲとニの両方を取り得るタイプを中心に取り上げ，各言語内での助詞の交替と，両言語間での対応の「ずれ」の様相を分析し，その要因や使い分けの条件を探っている。分析の結果，韓国語の를 reul は〈目的性〉が関与することにより標示可能になるのに対し，日本語のヲは〈目的性〉との結びつきが強くなく，〈目的性〉が関与するような名詞句もニで標示可能であること，韓国語の를 reul は 2 項動詞において有情物である[対象(相手)]を標示する機能を持っているのに対し，日本語では 2 項動詞であっても 3 項動

詞であっても[対象(相手)]を標示する機能はニが担っていること，などを明らかにしている。

第5章では，第4章で見た例よりもさらに典型的他動詞から離れた，ほとんど他動性が見られない構文において見られる日本語のガとヲ，韓国語の가 ga と를 reul の交替，および両言語での対応する助詞の不一致を取り上げ,その要因と使い分けの条件を探っている。具体的には，願望表現，可能表現，難易表現を中心に助詞の交替，両言語の異同について分析した。分析の結果，願望表現では，日本語，韓国語ともに「食べる」,「言う」,「見る」など他動詞でありながら他動性が高くない動詞が願望表現になるときガ，가 ga を取りやすく，さらに，名詞句が限定的な意味であるほどガ，가 ga を取りやすい傾向が見られた。ただし，韓国語の願望表現は,日本語よりも가 ga を使用するための制約が強く,가 ga を取り得る動詞は限定されている。さらに，日本語の可能表現においては，表す事態の〈動作性〉〈状態性〉という性格がヲとガの選択に関係していることを指摘している。一方，韓国語の可能表現，難易表現については，調査したデータでは가 ga を取る例が見つからなかった。このような分析から，韓国語の가 ga が[対象]を表示できる範囲が日本語より限定されていること，日本語では構文構造の変化に伴って助詞が変わることがあるが，韓国語ではもとの構文構造を維持する傾向があることを指摘している。

第6章では，これまでの考察を整理し，日本語，韓国語ともに他動性と助詞の使用に関連性があること，他動性が低い動詞になると韓国語より日本語の方がより早い段階でヲからニ・ガへの交替が起こることを述べ，従来個別的に論じられてきた助詞の使い分けを他動性という観点から統一的に考察し，助詞相互の関係性を明らかにすることができたと述べている。

本論文は，他動性という基準をもとに，韓国語における助詞를 reul，에 e / 에게 ege，가 ga の使われ方，日本語における助詞ヲ，ニ，ガの使われ方を考察し，それらの助詞の関連性，韓国語と日本語の類似点と相違点を明らかにしている。従来，個別的に指摘されてきた日韓両語の助詞の違いを，他動性の観点から統一的に整理し，日韓の助詞の違いが，他動性が弱くなるにつれ生じていることを明確にした点は，本論文の大きな成果と言えよう。本論文で取り上げられた日韓両語における助詞の違いは，韓国語教育，日本語教育において学習の困難な事項とされてきており，本論文は今後の教育において有用な教授資料となると考えられる。また，韓国語の를 reul が日本語のヲより使用範囲が広い原因として行為の目的性が関連していることを指摘したのは，従来にない新たな知見である。さらに，分析は小説やシナリオなど実例のデータをもとに行われており，従来の作例中心の考察に比べ，実際の助詞の使われ方を示した点でも，今後の研究の参考になるであろう。

このような点において，本論文は，韓国語学，日本語学のみならず，韓国語教育，日本語教育の分野で高く評価される論文だと考える。なお，他動性の規定や[対象]の規定において厳密性に欠ける点があること，考察の範囲が広範囲に渡ったために，考察や論証が不足している箇所が散見されることなど，今後検討すべき課題も指摘されたが，それらが本論文の価値を損ねるほどのものではないことが確認された。

したがって，本審査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。